

令和4年度

福岡県移住者子弟留学報告書

---

2022 Exchange Students Program for  
Descendants of Immigrants from Fukuoka Prefecture

C o m p l e t i o n R e p o r t

Fukuoka International Exchange Foundation

公益財団法人福岡県国際交流センター

---

02

砥綿 太田 ジュリア 留理 (ブラジル福岡県人会)

九州大学大学院 芸術工学府

08

林 直人 ダニエル (在ボリビア福岡県人会)

九州産業大学 芸術学部

14

川島 麻耶 (メキシコ福岡県人会)

九州大学大学院 人間環境学府

20

古賀 金子 メグミ アレハンドラ (ペルー福岡県人会)

九州産業大学 芸術学部

24

仲村 せり ちよ (ハワイ福岡県人会)

福岡大学 理学部



ブラジル福岡県人会  
砥綿 太田 ジュリア 留理  
九州大学大学院 芸術工学府

私が「福岡県移住者子弟留学生」として、福岡に来たいと思った理由はたくさんあります。

5年前、姉のマリアーナが同じく県費留学生として福岡に来ていた時、テレビ電話で姉と話すと、「日本に住んで勉強するのが大好き」といつも言ったからです。それをきっかけに、私も日本に来て、姉と同じような経験をしたいと思いました。そして、福岡は私の祖父の出身地であり、祖父が住んでいた街についてもっと知りたいと思いました。また、会話と読み書きなど日本語のレベルを上達させたいと思ったからです。

実は、私は2021年に、令和3年度の県費留学生として来日しようとしたのですが、新型コロナウイルスの影響により夢をかなえることができず、時差の関係でブラジルの早朝にオンラインで九州大学の授業を受けました。そのため、2022年に再挑戦しましたが、同じく、オンラインでの講義のみで日本に行けないかもしれないという不安がありました。しかし、2022年4月、やっと日本、福岡に来ることができ、学校に行き、対面での授業に参加し、あこがれていた福岡で生活するという経験をすることができてとてもうれしかったです。

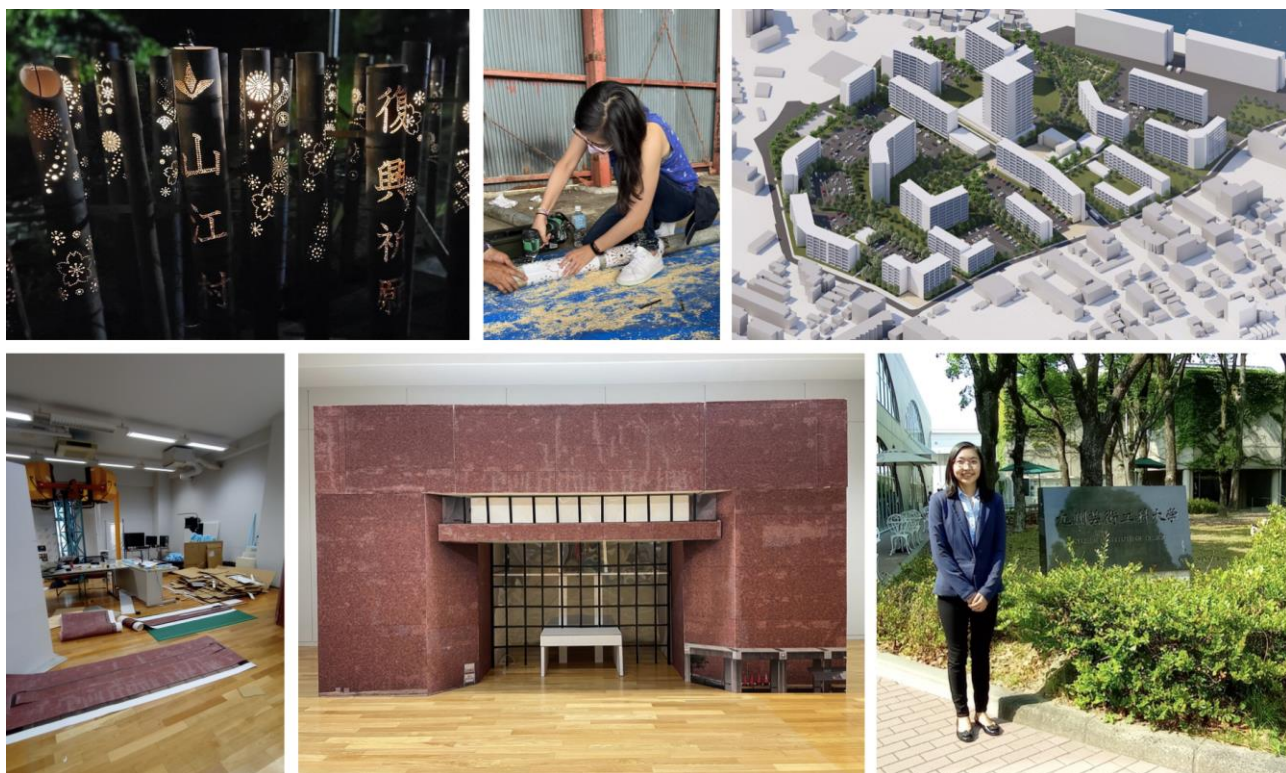
ブラジルで卒業論文のテーマを決める前に、日本でさらに研究したいと思っていたのは、災害時の仮設住宅について勉強することでした。日本は自然災害の多い国なので、より勉強になると思ったからです。それで、私は九州大学芸術工学部環境設計コースに所属し、田上先生の研究室で研究することを決め、1年間たくさん研究し、豊富な知識を得ることができました。

そして、「KASEI」というグループのイベントに参加する機会がありました。「KASEI」は九州の建築学生で構成されており、仮設住宅に住む人々の生活の質を向上させるための活動やプロジェクトを行っています。私が参加したイベントでは、熊本の山江村の住民のために竹灯籠を作りました。灯籠の制作だけでなく、仮設住宅を間近で見ることができ、とても良い経験になりました。

私は自分の研究以外にも、田上先生の2つのプロジェクトに参加することができました。1つ目のプロジェクトは大野城市役所の模型を研究室の仲間と一緒に組み立てるプロジェクトで、2ヶ月間、毎週ミーティングを行い、模型のパーツをカットし、組み立てました。4m×2.5mという大きな

模型なので、切り方、構造、組み立て方を整理するのに時間がかかりました。このような大きな模型を組み立てるのは初めてだったので、とてもやりがいがあり、面白かったです。

また、田上先生と一緒に参加した2つ目のプロジェクトは、福岡の団地エリアの建て替えプロジェクトでした。新しい住宅をどのようにデザインし、どのように空間を構成するかを決定する会議に参加しました。最終決定後、建築に使うコンピューターソフトで3Dモデルを作るため、先生を手伝いました。



田上先生のゼミのほかに、大学の色々な授業にも参加しました。日本語の授業、日本のデザイン、造園デザインなどの授業です。ほとんどの授業が日本語で行われたので、福岡での1年間、日本語能力を上達させることができました。

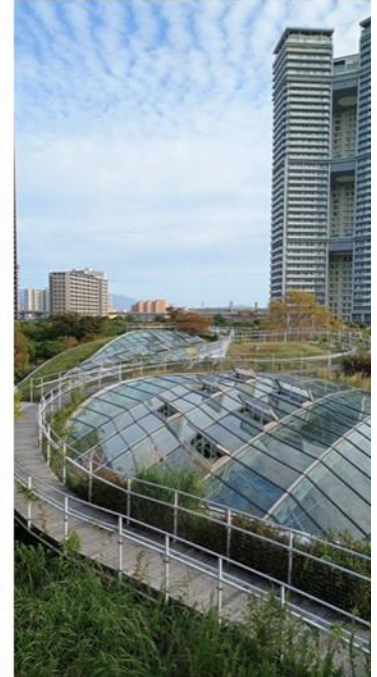
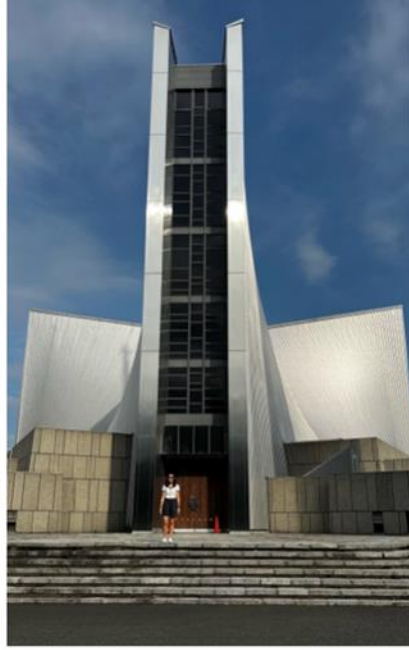


学校活動以外に、家族会のメンバーが主催するイベントに参加して、日本の文化をより深く知り、体験することができました。バーベキューにも行って、目隠しをしたスイカ割り活動に参加しました。そして、浴衣の着方を学び、夏の南蔵院や博多のお祭りに行くために着ることができました。また、陶芸の皿、カップ、人形の作り方を学び、柿を木から取りに行き、新鮮な果物を食べることもできました。かわいい着物を着て、茶道体験もできました。

そして、今回、初めて冬に行われた、子弟招へい事業に参加し、日本の小学校を訪問して日常生活を体験したり、餅つきをしたり、小倉城や小倉の歴史を学んだり、太宰府天満宮や足湯に入ったりしました。



この1年間、私は日本のさまざまな場所を訪ね、日本の建築、文化、歴史について学ぶことができました。北海道の札幌では、安藤忠雄氏が設計した「頭大仏」を訪れました。庭園とトンネルを抜けるまでは、仏陀の大きさを感じることができませんが、抜けると高さ13.5メートルの仏陀に出会えるので、とても印象的な場所でした。東京では、有名な建築家である丹下健三氏が設計した教会を訪れました。また、国際フォーラムや国立新美術館など、印象的な構造を持つ場所にも行きました。そして、友人と富士山に登り、山頂からの素晴らしい眺めも見ました。京都では、たくさんの神社やお寺を訪れ、その歴史について学ぶことができました。神戸では、神戸港震災メモリアルパークを訪れ、阪神大震災が神戸にもたらした被害を間近で見ることができ、災害について、そして耐震設計などについて学ぶことができました。広島と長崎では原爆資料館を訪れ、日本にとってどれほど悲しく、恐ろしい歴史であったかを目の当たりにし、福岡では、建築家の伊東豊雄氏が設計した体験学習施設「ぐりんぐりん」を訪れ、その形状が環境にカモフラージュしていることが印象的でした。



日本に来なければ会えることができなかつた親戚とも知り合うことができました。福岡に住んでいる保証人とは福岡に来てから10か月ほど経ってやっと会うことができましたし、北海道に行ったときは2日間かけて函館に行き、父の従兄弟に初めて会いました。いろいろなところに連れて行ってもらって、函館の歴史を知ったり、父方のおじいちゃんが勉強した学校や、修道院に連れて行ってもらったりして、勉強になりました。祖父が通っていた場所を見て、祖父をととても身近に感じることができ、とてもよかったです。東京に行ったときは、大叔母と叔父の家に泊まり、コロナウイルスの影響でブラジルに行くのはできなかったのも、とても長い間会っていなかつた父の従兄弟にも会えたので、一緒に過ごす時間が増えてとてもよかったです。



日本、福岡で勉強する機会を与えてくださった福岡県、ブラジル福岡県人会、福岡県国際交流センターにとっても感謝しています。この1年間、私は日本文化についてもっと学び、たくさん経験をすることができました。日本語をたくさん練習し、学ぶことができ、祖父の故郷をより知ることができました。ブラジルに帰っても、ブラジル福岡県人会のイベントや活動を手伝い、ここで得た建築と日本語の知識を、今後のブラジルでの仕事や県人会の活動で活かしていきたいと思っています。また、色々なプロジェクトに参加する機会を与えてくださり、教えてくださって田上先生に心から感謝しています。

最後に、同じく令和4年度福岡移住者子弟留学生である、麻耶、めぐみ、せり、直人にありがとうございます。すばらしい一年間を一緒に過ごすことができてありがとう！そして、この1年を通じて、さまざまなアドバイスをいただいたジュリアノ先輩にも感謝します。

九州大学大学院芸術工学研究院

教授 田上 健一

(砥綿指導教員)

太田ジュリアさんは、九州大学大学院・芸術工学府・環境設計コースに1年間の特別研究生として在籍しました。

Covid-19の影響下で当初スケジュールから延期されましたが、2022～2023年に無事にプログラムを終了します。

大学では、建築設計プロジェクトや建築デザイン関連講義科目を履修しました。また、研究室(建築計画)のゼミでは、「災害被災地の復興デザイン」や「集合住宅団地の更新デザイン」についての調査・研究・計画に取り組みました。

特に、被災地復興や仮設住宅計画への関心が高く、2016熊本地震および2019熊本水害被災地の復興状況や仮設住宅地、コミュニティの現状などを視察しました。復興支援の学生ネットワークにも参加するなど、現地へ赴いてフィールドワークを実施したことは貴重な体験となったはずです。研究室で取り組む団地建替え計画のプロジェクトにも参画し、プログラミング設計のトレーニングを行いました。

休暇中には、日本の現代建築、伝統的建築を数多く訪れたようです。建築の知識や空間体験を重ねたことは、今後、計画者・設計者という専門家として仕事をしていく上での糧として、大きく生かされるはずです。

研究室の様々なイベントにも参加してくれました。温厚な人柄から、大学院生や他の留学生など、研究室のメンバーとも交流を深めたようです。これからの日本-ブラジルの交流のブリッジとしても大いに期待されます。





在ボリビア福岡県人会  
林 直人 ダニエル  
九州産業大学 芸術学部

「県費留学生はすごい！めっちゃ助かった！」

2017年の夏に県人会担い手育成事業の子弟招へい参加者として福岡を訪れた弟から福岡の色々な話を聞いているなか、一番頭に残った一言です。その時から「県費留学生」ということを初めて知り、いつか僕も福岡に行ってみたいと思っていました。

そして年が過ぎ、福岡県移住者子弟留学生として日本に行けることができましたが、一人で、知らない国で暮らしながら大学に通うのが正直怖くてなかなか応募する勇気がなく、自分の日本語力にもあまり自信がありませんでした。しかし、ボリビアの大学を卒業し、父が長年在ボリビア福岡県人会の役員を務めていて、いつもイベントや歓送迎会に参加してその話を聞いていたこと、元県費留学生の友達からも福岡のことをいっぱい教わっていたこと、県人会の皆から応援された結果、無事に2022年の4月20日に令和4年度福岡県移住者子弟留学生として福岡に来ることができました。

来福してから早速大学でお世話になる担当の先生の所へ伺い、前期に受ける科目の選択を行いました。僕はこの約一年間、九州産業大学で芸術学部の生活環境デザイン学科のプロダクトデザインを勉強しました。プロダクトデザインを専攻した理由はボリビアで産業工学を卒業していて、カリキュラムの中にプロダクトデザインに関する科目がいくつかあって、その科目がとても大好きだったからです。それで九産大では実習の科目を主に選びました。

前期は日本の暮らしに慣れながら大学の授業で精一杯で、知らないことが多すぎる中、同級生は全員優秀で「自分も彼らには負けていけない」という気持ちになり、とにかく必死でした。最初は友達があまりできずにいましたが、前期の終わる頃に皆で自分が制作した作品を発表する時、いろんな学生から「直人のデザインめっちゃ良かったよ」「この作品とても好きだよ」とコメントをしてくれて苦労した甲斐があったと感じました。前期は立体構成、CG（コンピュータ・グラフィックス）演習、デッサン、モデリング実習Bと日本語の授業を受けました。その中で僕は立体構成で作った「ビルダーカード」の作品をとても大切にしています。

夏休みには20年間会ってなかった親戚に会いに埼玉と東京に行きました。しかし、この時期にボリビアでおじいさんが亡くなりました。訪ねた親戚はそのおじいさんの息子と娘です。少し落ち込んでいたため、彼らは僕を励まそうと色んな所に連れて行ってくれました。もちろんおじいちゃんがよく通っていた所にも行き、彼を近くに感じる事ができて親戚にはとても感謝しています。

親戚との出会いの後、ほかの留学生と合流して「青春18きっぷ」を使い、普通電車で東京から福岡まで戻りました。長い旅だったので色んな都道府県に行けて、福岡に着いた時はくたびれていましたがとてもいい思い出になりました。

南米の夏を耐えきれぬなら日本の夏はへっちゃらだと思っていましたがその頃はまだ真夏でボリビアの夏とは比べ物にならないほどとてもしんどかったです。でも、夏のイベントがたくさんあり、家族会の方々のお陰で浴衣を着て、色んな日本と福岡のお祭りに行き、夏休みを満喫することができました。

そして夏の終わりには後期授業が始まり、同級生とどの科目を選択するのかと聞きながら自分も受けたい授業に参加し、日本語が上達でき、友達もたくさん増えたため、この約一年間で一番好きだった時期は後期だと思います。それに自分もこの生活などに余裕ができ、新しいことに挑戦しようと大学のサークルとジムに入りました。

サークルは「異文化交流会」というサークルで、簡単に説明すれば留学生と日本人の学生が交流できる場です。そこで色んな国籍をもつ学生たちと座談会を何回かし、「世界は広いようで狭い、そのお陰でこのサークルも存在できる」という結論がでて、その通りだと思います。スペイン語の講座も引き受けて僕の母国語に興味を持った学生も何人かと交流できとても嬉しかったです。

ジムに通い始めた理由は5月から毎日香椎浜を一周走っていて、9月になると体重は大分減りましたがジョギングを続けても、距離の長さや走る速さを調整しても、自分が欲しい身体になかなか近づけず、ちょっと戸惑ってました。そのため、大学のジムに入ってコーチにサポートされながら新しい目標も立てて、毎日の授業の終わりにジムに行って筋トレをして今は自分が満足できるくらいまでたどり着きました。

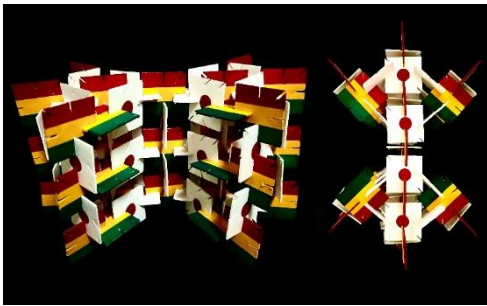
後期の授業に関しては、ものづくりがしたかったため実習の科目を多くし、レンダリング実習、材料加工実習A、材料加工実習Bと日本語の授業を受けました。その中で僕は材料加工実習Aで作った椅子と材料加工実習Bで作ったお弁当箱をとても大切にしています。そして前期から日本語の授業を受けていて12月に行った日本語能力試験N2をかなり高得点で合格することができました。先生にはとても感謝しています。

後期が終わって年末が近づいていたので新年を迎えるために埼玉のおじさんの家に行きました。東京のおばさんも来られてボリビアで過ごすお正月とは違うお正月を体験することができ、とてもいい思い出になりました。

1月の中旬にはコロナの影響で中止となっていた子弟招へい事業が再開して、あいにくボリビアからは誰も来ませんでした。多くの県人会からたくさんの子供たちが来ました。一人で5人の男の子の面倒を見るのは大変でしたが、皆が帰国した後に何人からか「直人みたいに日本語をうまく話せるために勉強して県費となって福岡に戻ってくる！」というメールが来たので、単なる留学生として小さい子にそこまで影響を与えることができるのかと感動しました。

2月には八女市に住む親戚の家に行くことができました。この留学の一つの目標である僕のルーツを知るためにおばあちゃんの出身地の黒木町に行っておばあちゃんのお姉さんと共に歩きながら昔の話や思い出を語ってくれました。福岡の親戚はボリビアの家族とあまり交流していないのにもかかわらず僕を昔から知っているかのように可愛がってくれて、福岡についた時から色々助けられ、本当に感謝します。

そして日本・福岡に一年間過ごし、勉強ができ、自分のルーツについてもっと知るという機会をくださった福岡県と福岡県国際交流センターや在ボリビア福岡県人会には言葉では表せられないほど感謝の気持ちでいっぱいです。ボリビアに帰っても、県会の一員として積極的に活動し、これから来る県費留学生の後輩や子弟招へい事業の参加者に役立てるよう、ボリビアと福岡の架け橋になれるよう頑張りたいです。





今回の県費留学の方の受け入れは、私にとって初めての経験でした。受け入れ前の打ち合わせでは、南米ボリビアからの長期滞在ということで日本の大学での生活に馴染めるだろうか、と心配しておりましたが、直人さんに会ってその心配は払拭されました。

現地の大学を卒業してすぐとは思えない、日本の同年代の卒業生と比べるとはるかにしっかりとした若者で、安心して1年間、彼を受け入れることができました。芸術学部の授業では、本学の特徴でもある、実際に手でものを作る授業に参加してもらいました。地味な作業も多かったですが、授業の終わりに感想を聞いたところ「楽しかった」という言葉が聞けて安心しました。直人さんの受け入れは私にとっても刺激的で、異なる文化に触れる貴重な機会でした。彼の故郷ボリビアについても事ある毎にインターネットなどで調べるようになりました。

コロナ禍ということもあり、大学も世の中の感染状況に併せて感染対策の措置が取られており、通常とは違う環境で不自由なことも多かったと思います。大学では授業外の活動がかなり制限されており、放課後や休日などに本学の学生と交流したり話をしたりすることも少なかったのではないかと思います。長期休みには県外にも出かけていたようで、日本を楽しんでいた様子です。芸術学部の授業の他にも、一般教養の授業も履修していた様で、日本の大学生活を堪能したのではないかと推察します。

今回の留学をきっかけとして、日本のお家芸でもある、ものづくりにも関わって欲しいと願っています。そして、日本とボリビアをつなぐ架け橋として活躍してくれることを期待しています。



メキシコ福岡県人会  
川島 麻耶  
九州大学大学院 人間環境学府

メキシコ福岡県人会から令和4年度の福岡県移住者子弟留学生としてきました、川島麻耶と申します。メキシコの北東部に位置するヌエボ・レオン州の州都、モンテレイ市出身です。私はモンテレイ大学（UDEM）で工業デザインの勉強をしました。

この留学のおかげで、初めて福岡へ来ました。私と福岡と県人会の繋がりを説明しますと、私の母方のひいおじいちゃん（大熊貞蔵）が福岡県浮羽郡に属していた田主丸町で生まれました。1928年頃にメキシコへ移住して、1952年に他の日本人移住者と共にメキシコ福岡県人会を設立しました。貞蔵さんの次男、私の祖父である大熊正己さん（日系2世）はメキシコで生まれ、1996から1997年にメキシコ福岡県人会の会長を務めて、その後亡くなるまで県会の一員でした。そして正己さんの長女が母の大熊マリア・エレナであり（日系3世）、1989年に九州大学で福岡県移住者子弟留学生として福岡へ来日しました。私も家族と福岡の繋がりを続けたい意思で、福岡県移住者子弟留学生として来ました。

今回の留学では、九州大学大学院人間環境学府教育システム専攻で田北先生の研究室に所属させて頂きました。私の研究テーマは「日本に住む難民の子どもたち」です。具体的に、母国で紛争や人権被害にあった子供たちが、日本で難民として受け入れられて、新しい生活の中でどのような環境や教育問題、日常の不安があるかについて研究しています。どのような毎日を過ごしているのか、全く知らない国へ来日して、言葉も文化も知らない大きな壁があり、どんな不安をもつか、また日本人の子どもたちとの教育差や子供の権利に関して調べています。他にも日本の難民受け入れ制度や現状、日本に住んでいる大人になった難民の子どもたちのインタビューや子どもたちの心理的なトラウマの対応についても調べています。現在、難民問題は世界的に大きな課題であり、とてもセンシティブで、情報の取得は少し難しく日本語の資料も制限されている中、田北先生のおかげで色々なアイデアや進め方のアドバイスをもらいました。

この研究をきっかけに、難民と日本の子供たちに「戦争・難民」とは何か、異文化が存在する共生社会に向けて教えるためのツールを作りたいと思います。これは留学が終わる

まで完了させることは難しいですが、メキシコへ帰ってもプロジェクトとして進めたいです。これが子供たちの将来への導きや抱えている不安を減らすために少しでも役に立ってもらえることが目的です。



研究と共に田北先生の授業も受けました。例えば、「まちづくり基礎論」という授業では、先生が現在取り組んでいる里子さん、実子さん、そしてこれから里親家庭で過ごす子どもたちのためのフォスティングカードキット『TOKETA』というプロジェクトのPR・使い方ビデオの制作やイベントの企画、アンケート回答のデータ分析などに関わりました。こちらが2月24日に福岡で開催されたイベントの一つです。3月15日に大阪でもう一つのイベントを開催する予定ですが、もうすでに帰国しているので、残念ながら参加できません。



<https://toketa.jp>

私は留学の始めに、福岡県国際交流センターや家族会への表敬で3つの目標を発表しました。これを頭に入れて、一年間で目標の達成へむけて頑張ろうと思い、活動してきました。

まず一つ目の目標は、イベントや企画に参加することで日本の文化を学ぶことと友達をたくさん作ることでした。この一年間、数えきれないほどのイベントに参加しました。その中には、家族会からは日本の文化を味わえる色々な企画を立てもらいました。柿狩り、焼物体験、浴衣着付け体験、いちご狩りや福岡の歴史案内そして、着物着付け体験、茶道



をしてもらいました。家族会のメンバーとも親しくなりました。皆さんにはとても感謝しています。



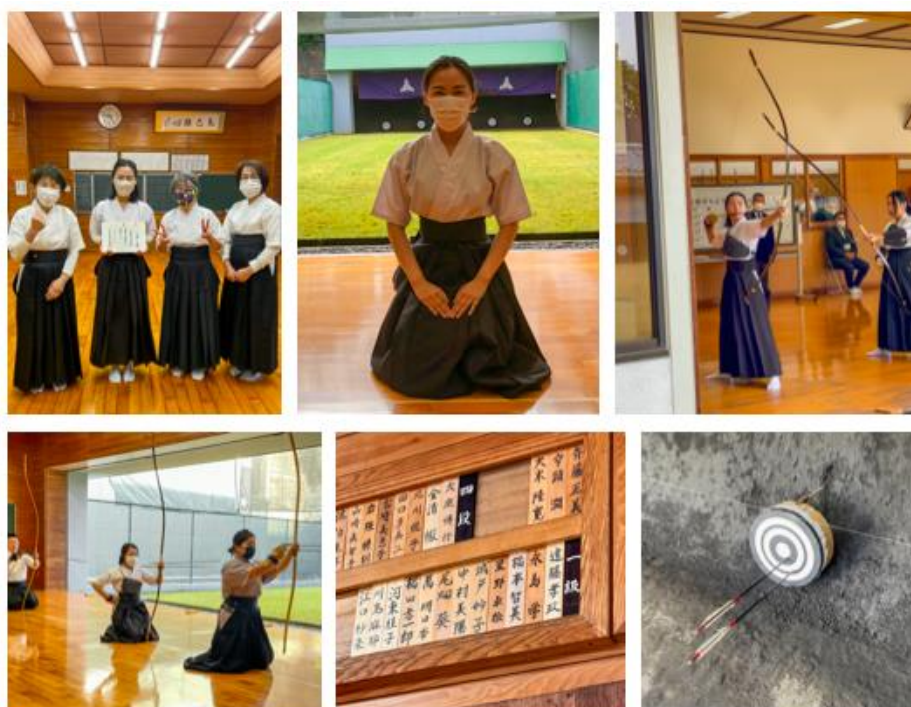
また、福岡県国際交流センターが実施している子弟招へい事業にも参加しました。今年の子弟招へい事業は、初めて冬に行われて、子どもたち、青年リーダーと私たち留学生が日本の冬しかできないものを初体験することができたので特別な事業でした。餅つき体験、小倉・福岡観光、日本の小学校訪問はとても勉強になりました。子供たちの母語がスペイン語、ポルトガル語や英語と様々であるなか、みんな仲良しで、正にこれが異文化交流と感じました。

大学のイベントもありました。KUIFAとQUESPAと言う国際交流とラテンサークルに所属していました。留学生のために日本の文化を学ぶ企画や逆に外国に興味がある日本人学生向けの企画などさまざまな活動をしました。例えば、ラテン料理会、ランゲージテーブル（LANGUAGE TABLE：言語の教え合い場）や節分大会などがありました。みんな自分の文化をお互い教え合う場でした。私もメキシコのことを日本人や他の

国の留学生に教えました。学校だけではなく、他にも友達の友達や偶然の出会いでいろんな友達ができました。これからも縁を切らずに、連絡を取り合おうと思います。



この留学で最も日本の文化を理解することができたのは、弓道のおかげでした。弓道とは心身の鍛錬をする日本の武道であります。元県費生の先輩からの紹介で弓道に出会い、とても関心があったので、6月から中村先生の下で正式に習い始めました。稽古ごと、動作や射法の意味、武道で使う言葉を学び、弓道への関心と愛が大きくなりました。12月には初心者の審査を受けて、結果1級をもらいました。中村先生、弓道仲間との稽古と当時の審査の経験は、一生忘れられないことです。現在も指導を受け続けています。メキシコへ帰ったら、続けることは難しくなると思いますが、近々また弓道場で弓を引けることを願っています。



次に二つ目の目標は、日本語能力を上達させることでした。大学の研究室では、みんなは日本人なので、ゼミや授業はすべて日本語でした。ゼミでは各自、自分の研究のことを報告しました。最初は専門用語を覚え、使うことがとても難しく、報告書を書くのにも普段の2-3倍の時間がかかっていました。おかげで新しい言葉や正しい文法を学び、まだ時間かかり、戸惑う時もありますが、日本語で発表することは少し自信ができました。他にも弓道では、挨拶・お礼の正しい言い方や礼儀を学びました。

最後に三つ目の目標は、福岡に住む親戚と触れ合うことでした。北九州に住んでいる親戚とは初めてで、会うことができました。食事に行ったり、小倉を観光したり、いっぱいお話ししました。とても貴重な時間でした。他にも両地区の家族会からの協力で、ひいおじいちゃんの大熊貞蔵さんの出身地である田主丸町に親戚がまだいるか探してもらい、家族から聞いた情報を基に色々調べてもらった結果、奇跡的に遠い親戚が見つかりました。10月に訪問して、ひいおじいちゃんの事を色々語ってくれて、貴重な写真ももらいました。現在は家系図を作成中なので、新たな家族を追加することができて嬉しいです。



最後に、お礼を伝えたいと思います。まず、この留学を進めてくれた両親、留學生活を支援してくれた福岡県国際交流センターとメキシコ福岡県人会、本当の家族みたいに優しくしてくれた家族会、日本での勉強に大変貢献してくれた九州大学の田北先生と学生のみなさん、弓道の指導者中村先生、久保さん、ミカエラ先輩、ジュリアノ先輩、楽しい時間を共に過ごした友達と元県費留學生の先輩たち、そしてこの一年間ずっと一緒にいた新しい家族と令和4年度の福岡県移住者子弟留學生4人：ジュリア、めぐみ、せりと直人に感謝でいっぱいです。この留學が終わっても何かあったら助け合える仲が作れて本当に嬉しいです。福岡での生活は毎日が新しい冒険と勉強でした。この経験は、県人会での活動、そして、これから働く職場で活用したいと思います。この1年間の福岡での留學は自分にとってかけがえのない経験でした。これからも頑張りたいと思います。これからも頑張りたいと思います。

みなさんありがとうございました。

川島麻耶さんは、九州大学大学院人間環境学府教育システム専攻の研究生として1年間、私の研究室に所属し、学業に励まれました。また、大学の留学生コミュニティや家族会、国際交流センターの交流イベント等に積極的に参加し、一生懸命日本文化を学ぼうとする姿勢に、日々感心していた次第です。

私の研究室は川島さん以外に留学生はおらず、授業もゼミも全てが日本語でした。聞き慣れない専門用語に難しさを感じていたはずですが、そうした大変さを微塵も感じさせず、いつも前向きに、そして学生たちへの思いやりを絶やさず接していました。研究室の学生たちに、今まで携わってきた仕事やプロジェクトについて紹介してくれたこともあります。インダストリアルデザインに携わってきた経歴は、研究室の学生たちにとって、とても新鮮な学びになったようで、ありがたい時間でした。また、研究室のプロジェクトとして、里親家庭の子どもたちを支えるためのツールのデザインや調査プロジェクトにも積極的に関わってくれました。そのツールは無事に開発を終え、イベント等も開催することができましたが、川島さんのアイデアとスキルが強く背中を押してくれたなあと振り返っているところです。

川島さんが、1年を通じてゼミの中で取り組んできた研究テーマは「日本に住む難民の子どもたち」です。子どもの権利や難民の現状、そして子どもたちへのケアの在り方で、日本語の文献にも積極的に目を通してながら、毎回丁寧なゼミ発表をしてくださいました。現在は、日本の子どもたちと難民の子どもたちが、希望を感じながら共に学ぶための学習ツールのデザインに取り組んでおり、メキシコに戻っても引き続きデザインに取り組むと聞いています。このテーマに象徴されているように、川島さんらしいデザインは、やさしく思いやりのある眼差しにあると感じています。完成する日を楽しみに待っています。

川島さんと出会えたこと、共に過ごせた日々心から感謝します。楽しく、かけがえない1年間でした。今後のますますのご活躍を心から期待しています。



ペルー福岡県人会  
古賀 金子 メグミ アレハンドラ  
九州産業大学 芸術学部

この一年があっという間に過ぎ、すでにプログラムを終えようとしています。写真や日本について新しい経験や知識を得る事ができ、忘れられない素晴らしい1年となりました。この1年間で、私には達成したい3つの目標がありました。たくさん写真を撮る事、日本についてもっと知る事、福岡県移住者指定留学生として楽しむ事です。これらの目標を念頭に置きながら留学に取り組み、最高の結果を出す事ができました。最初は慣れない生活で、言葉にも苦労しましたが、少しずつこの生活のペースについて行けるようになりました。

私はグラフィックデザイナーだったので、この機会に写真を勉強したいと思いました。写真はグラフィックデザインを補完し、通常グラフィックデザインと協力関係にある分野であるからです。学校での授業ではとても勉強になり、いい経験をする事ができ、写真の分野に関する新しい知識を得る事ができました。前期の授業で特に気に入ったのは、白黒フィルムの現像工程を学んだ事です。今までやった事がなかったので、特に暗室での作業はとてもエキサイティングでした。また、毎週スタジオでセッションを行いました。自分にとってはチャレンジでしたが、正しいアプローチの仕方を学びましたし、中判カメラも使う事ができて、素晴らしい経験でした。さらに、年間を通して受講した「ゼミ」では、様々なフィルターや編集テクニックを試し、楽しみました。例えば、夏休みの宿題で、PLフィルターを使って写真を撮りました。特にこのフィルターは、キラつきや反射を抑え、コントラストや色彩を強調する効果があります。夏場の水辺や空の撮影には最適です。後期の授業では、日本語での専門用語についてもっと知りたいと思い、「写真史」の授業を受けました。日本人の写真家についてや、写真史と日本の関わりについてなど、とても興味深い内容でした。特に印象に残っているのは、広告に関する授業です。広告のあらゆる種類の媒体、業界用語、成功する広告の作成プロセスについて学びました。日本のCMにずっと興味をもっていたので、この授業は今年のハイライトのひとつでした。セミナーの間、また様々なテクニックを試し続けました。私が気に入ったのは、UVライトを使ったプリント方法です。青写真も手付和紙一兵衛もそれぞれに魅力的で、仕上がりもとても気に入りました。最初の目標は達成できたし、それ以上に得る物がたくさんあった

と自信を持って言えます。今年もたくさんの写真を撮りましたが、写真に対する様々な視点やアプローチも学ぶ事ができました。全体として、今後役に立つ知識をたくさん得る事ができたと思います。荒巻先生に担当していただき、1年間根気よく教え、指導していただいた事に感謝しています。



勉強だけでなく、日本での生活や文化的に豊かな様々な活動を体験し、自分のルーツである福岡に触れる事ができました。福岡県国際交流センターの事業で慰霊祭、子弟招へい事業に参加しました。慰霊祭は初めての経験で、私たちは慰霊碑の周りを掃除し、慰霊祭の準備を手伝いました。初めて、仏教儀式に参加してみました。また、県人会担い手育成事業は、私たち県費留学生が参加者をサポートする10日間の短期プログラムであり、太宰府天満宮、小倉城、福岡タワーなど福岡の観光地を訪れ、楽しみながら新しい発見をする事ができました。また、家族会とは、バーベキュー、浴衣、陶芸、茶道と着物着付け体験、果物狩りなど、イベントがたくさんあり、とても楽しく過ごす事ができました。バーベキューでは、美味しい日本式バーベキューの他に、スイカ割りやハイキングなど、文化交流の機会にもなりました。また、浴衣の着方を習い、浴衣を着てお寺や神社に参拝できた事も大切な思い出であり、感謝します。陶芸体験も興味深く、滅多にない機会をいただき、とてもありがたいです。着物着付け体験では、今年の県費留学生全員が、着物を着

て、茶道について教わりました。そして、秋の柿狩りでは、ペルーではあまり見かけない果物で、とても気に入りました。冬にはイチゴ狩りがあり、福岡はあまおうが有名なので、特別美味しくいただきました。

また、親戚のおかげで、福岡や日本全体を探索する事ができました。彼らのサポートで、私の日本での1年間は想像以上に素晴らしい1年になりました。神社仏閣に行ったり、花火大会に行ったり、紅葉を見たり、クリスマスにチキンを食べたり、お正月の過ごし方など日本の文化や習慣を体験し学ぶ事ができました。どの経験も素晴らしく、一番印象に残っているのは、お盆に親戚に曾祖母が住んでいた場所を案内してもらった事です。



最後に、福岡や日本全般について語るには、料理を抜きにしては語れないので、私が試した物はすべて本当に美味しかったと言わざるを得ません。とんこつラーメン、あらゆる種類の明太子、刺身、寿司、せいろ蒸し、お好み焼き、あらゆる種類の餅など、どれも美味しくいただきました。私が立てた目標の二つは、日本についてもっと知る事と、この一年を楽しむ事でしたから、間違いなく達成したと言えます。新しい経験や素晴らしい時間にあふれた一年であり、たくさんの学びも得られました。

日本での留学は、私の人生の中で最も豊かな経験の一つであり、プライベートでも仕事でもとても充実したと思います。学問的に学ぶだけでなく、文化的にも豊かな生活を送る事ができ、また、家族の歴史についても学ぶ事ができたからです。

このような1年間を経験する事ができて本当にありがたいです。

古賀 金子 メグミ アレハンドラさんは「日本の視点からの写真／写真の新しい知識と技術」という研究テーマの元、写真・映像メディア学科に1年間、研究生として在籍し学業に励まれました。

メグミさんはデジタルカメラでの撮影技術・画像処理の基礎については既に修得をされていたので、いままで体験したことのない、アナログ銀塩での写真表現や、ストロボ照明などを使ったライティング技術を習得できるような授業を履修し技術の修得を目指しました。また、デジタル画像処理についてもさらに高度なスキルを修得できるよう画像処理を主とする授業にも参加しました。

所属したゼミナールでは、カラーマネージメント技法をはじめ、撮影技法としてPLフィルターやNDフィルターを使用したフィルターワーク・赤外線写真などの技法を習得され、作品を制作しました。ゼミナールでは所属する日本人の学生と積極的に交流し、ペルーと日本の文化の違いをはじめ、様々な話題で盛り上がっている様子を伺うことができました。学生も他国の文化や考え方に触れることができ、いい刺激になっているようでした。

また、日本の視点からの写真というテーマを元に、写真の撮影をされており、交流センターのイベントをはじめ、旅行の際などに撮影を行い、しっかりと自身の研究を進めることができていました。ゼミナールの一環として、古典技法による作品展示を2回実施しました。メグミさんは日本で撮影した写真を展示されましたが、他の教員や学生からも面白い視点で撮影されていると好評でした。

専門の写真以外でも、日本語の授業にも参加されました。授業の課題は大変そうでしたが、1年間を通して日本語のスキルも確実に上達されました。

コロナウイルスの影響もあり、過去の留学生受け入れ時とは状況が異なり、学生同士のコミュニケーションの機会が少なくなっている中、大変だったとは思いますが、1年間しっかりと研究をすすめ、知識・技術の習得を進めることができていました。

帰国後の活躍を楽しみにしております。





ハワイ福岡県人会  
仲村 せり ちよ  
福岡大学 理学部

私はハワイのホノルルに生まれ、日系移民4世で、私の家族は曾おばあさんと曾おじいさんがハワイに移住した時からずっとハワイに暮らしています。子供の頃、妹と私がおばあさんに祖先の事の質問をしたら、おばあさんは私達に、曾おばあさんと曾おじいさんは若い頃ハワイに来て、新しい生活を始めた話を聞かせてくれました。小さいスーパーマーケットを開き、コナコーヒーを育て、家族は一生懸命頑張っていたと語ってくれました。曾おばあさんと曾おじいさんのことは、本当に尊敬しています。もう彼女達は話を詳しく聞かせてくれませんが、生まれた場所のことは学べると思い、県費留学生として福岡に来ることが決まりました。

子供の頃、日本のルーツの事は全然知らなくて、福岡に住んでいる親戚と一回しか会えなかったです。親戚と会った時は、日本語は全然話せず、しかも、自分のルーツの事はあまり知りませんでした。日本文化については、お正月の餅つきしか知らなかったです。実は私は子供の頃、日本のルーツに興味がありませんでした。中学一年生の時に、日本語の授業をとったことをきっかけに、日本語を習い始め、日本文化に興味を持ち始めました。

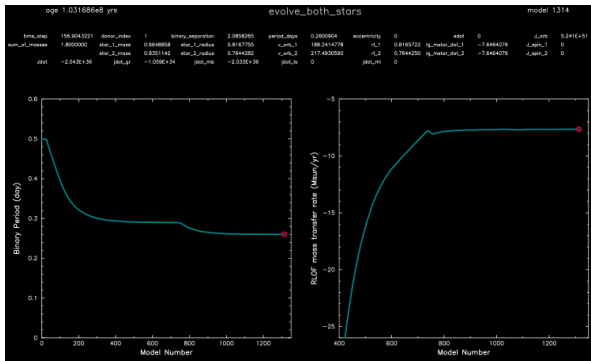
そのため、令和4年度の福岡県移住者子弟留学生を志願し、福岡に来ることを決めました。実は、その頃、コロナウイルスのことで、私はアメリカの大学を転校し、専門も変え、ちょっと迷っていました。しかし、大学を卒業する前この福岡県移住者子弟留学生事業に参加することは「一期一会」と思ったので、福岡に来ました。

私は来福する前、三つの目標をたてました。1つ目は、曾おばあさんと曾おじいさんの親戚と現在、北九州に住んでいる親戚とたくさんの時間を過ごすことであり、日本にいる間、親戚とともにご飯を食べに行ったり、ショッピングをしたり、神社でお参りをしたりすることができました。また、福岡の親戚と同じ趣味があるとわかり、そのおかげで色々なことを話すことができ、この機会に親戚との繋がりがもっと強くなりました。



二つ目は、多くのことを学ぶことです。福岡で研究したかった課題は、私にとって初めての研究プロジェクトでした。福岡大学の端山先生の研究は自分がしたかった研究テーマに近かったため、先生と色々な事を話したいと思いました。福岡に来てから大学で初めて端山先生に挨拶した時、端山先生と研究のことを話し合い、自分の研究プロジェクトの計画を立てました。そして、その中で、私は、端山先生が現在研究している重力波望遠鏡のデータを簡単に取ることができるウェブサイトを作りました。私が作ったそのウェブサイトを使ったら、望遠鏡のデータにアクセスし、解析することができるのです。私はこのウェブサイトを作るために、カグラという重力波望遠鏡が位置している、富山県と岐阜県の間の方まで行きました。そこで自分の目で重力波望遠鏡を見ることができ、また、データの読み方について説明も頂くことができました。

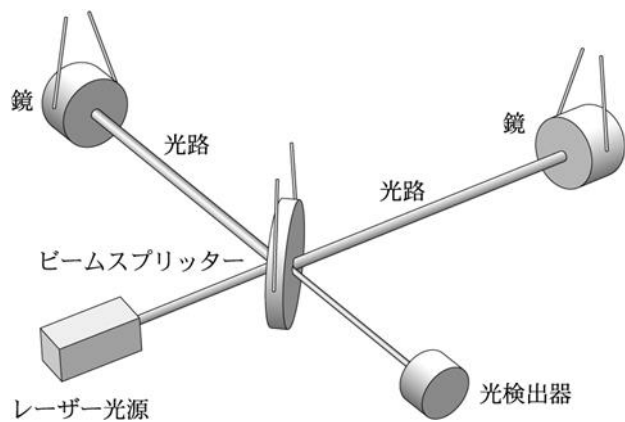




そして、私は、その他に、また違うプロジェクトも研究をしました。「りょうけん座AM型星 (AM CVn)」という最近発見された星の天体を、「メサ (MESA)」という1Dプログラムを利用し、造形するプロジェクトのことで、りょうけん座AM型星の天体の中には「白色矮星」と「激変星」とい

う二つの星 (連星) があります。白色矮星は激変星の星からヘリウムの物質を吸着します。今、私が使っている造形プログラムは、数値情報とグラフしか表示されないプログラムですが、私は、2Dのプログラムを作りたいと思っています。

また、8月には福岡大学で入学を希望している高校生向けにオープンキャンパスが開かれ、週末でしたが、私は研究室に行き、高校生に天体物理科学部のことを紹介しました。ここで初めて日本語を使い、物理科学の基本と現在、研究で使われるマイケルソン干渉計ということの基礎を説明しました。マイケルソン干渉計とはレーザー光線と鏡のシステムのことです。これは、光がレーザー光線から出て、斜めに立っているビームスプリッター、そして、ハーフミラーを通り、二つのビームがハーフミラーからでることで、二つのビームが裏にある鏡に映され、またハーフミラーに戻り、一つのビームになることです。この、一つのビームは光検出器を読み取ることができます。この模型を現物大の大ききで作れば、重力波望遠鏡を作ることができます。このようなことを日本語で説明したので難しかったですが、楽しい経験ができました。





三つ目は、日本の文化と景色をたくさん経験してみることでした。春学期、私は「なぎなた」の部活に入り、夏休みまで練習をしました。なぎなた術の美しさと強さを学ぶことができました。夏休みが終わってからは、お琴を学びました。お琴を弾くと、日本ならではの穏やかな音を聞けます。そして、他には福岡県国際交流センターと家族会からのイベントのおかげで、色々体験することが

できました。その中でも茶道体験と着物の着付け体験はとても印象的です。そして、日本の景色を眺めるため、富士山の頂上に登りました。また、藤の花を見に、北九州までにも行きました。また、大阪と京都を訪ねました、京都では清水寺や有名な道を歩き、日本の文化を強く感じられることができ、「本当に日本っぽい」と思いました。



1年間の県費留学の間、上手く日本語で話すことができなかつた時もあります。言いたい事が伝わらず、相手からの日本語の意味が分からず、大変でした。しかし、それに負け

ず、立ち上がって、進もうとしました。今も、多くの人の前で話す時は緊張しますが、一人一人と話すときには、楽に話せるようになりました。日本・福岡に来た時と比べると、自分が成長したと思います。日本語がより分かり、話せるようになったからだけではないです。1年間、ここで研究のため計画立てること、そしてここで出会った多くの仲間と、友達、先生、サポートしてくださった方々との出会いがあったからこそ、大きく成長することができたと思います。このようなことから、ハワイ福岡県人会を代表し、令和4年度福岡県移住者子弟留学生として福岡に来ることができたことに感謝します。

福岡大学 理学部  
准教授 端山 和大  
(仲村指導教員)

仲村さんは、福岡大学理学部物理科学科の本研究室に所属し、1年間、熱心に勉学に励み、サークル活動を行うなどして、充実した毎日を過ごしており、私は大変感心しました。大学では、単位取得とは無関係に物理や情報の授業に自主的に出席し勉強していました。それとともに研究室での活動も行っており、特に重力波望遠鏡 KAGRA の望遠鏡診断システムのウェブアプリケーション開発という、野心的なテーマで研究活動を進めていました。8月の初めには、大学のオープンキャンパスがあり、その中で当研究室ブースに参加し、研究室の学生とともに、来場者に実験のデモンストレーションや研究の説明を行いました。特に、重力波望遠鏡の基礎となるマイケルソン干渉計の仕組みや動作を実際に干渉計を動かしながら説明を行い、活躍していました。

8月の終わりには、岐阜県神岡町にある KAGRA のサイトを訪問し、実際の望遠鏡を見学し、仲村さんの行っている研究についての理解を深めました。この訪問では、研究者たちの前で研究のプレゼンテーションを行うなど、研究活動もアクティブに行いました。

9月からは、毎週行っている KAGRA の中の望遠鏡診断グループミーティングに参加をし、関連する研究報告共有し、共同研究活動も行いました。また仲村さんはグループミーティングで研究報告を行うなどして、プレゼンテーションについての経験も積みました。仲村さんは、1年間、研究室での催し物や研究活動を積極的に行い、私も受け入れ教員として、とても良かったです。

こうした経験が、仲村さんのこの先の生活に役に立つことを願っています。